

1 ヤコブ

今回の旧約の学び、イサクから始まって、話はエサウとヤコブに移り、いまやヤコブ一人に焦点が絞られつつあります。ただ大きなくくりとしてはまだイサク物語の枠内にあります。そのイサクの死が伝えられるのは、もう少し先、三五章です。そこまでのヤコブについて、場合によっては取り上げない箇所も出てきますので、簡単にここで少し先取りして申し上げておきます。

ヤコブは、先週まで見たように、母リベカの策略に従い、父イサクの祝福を兄エサウから騙し取ってしまいます。エサウの怒りが殺意にまで昂じる中、ヤコブは家を離れ、逃れざるをえなくなります(二七・四一～四五)。

今日の箇所は、そのヤコブが逃れの旅に出たところです。目的地は、最初の節にあるように、メソポタミヤのハランです(一〇節)。ハランまで、ベエル・シェバから北へ直線で七、八百キロ。一人旅です。ヤコブは旅路を守られ、ハランに到着し、母リベカの兄ラバンのもとで暮らし始めます(二九章)。

ヤコブがハランで伯父ラバンのもとにいたのは二〇年です。いわば居候の身です。しかし懸命に働いて、大きな富を築きます。

またハランに行く目的の一つに、結婚相手をラバンの家族から見つけるというのもありました(二八・二)。ヤコブはラバンの娘二人、レアとラケルを妻とします。その他にも側女(そばめ)がいて、男の子供は合わせて一二人。ご承知のようにこれがイスラエル一二部族の祖先になります。

伯父のラバン、ヤコブにとっては舅にも当たるわけですが、はじめ甥のヤコブを大歓迎いたします。しかしそれがだんだん変わってきて(三一・二)、ヤコブを妬み、いつまでも働かせようとするのです。しかしヤコブは、神の、今すぐそこを出て、故郷へ帰れという御告げもあつて(三一・一二)、家族を引き連れ、全財産をもって「逃亡」します。そしてそれに成功します(三一章)。

帰郷するヤコブ。凱旋とは言えないまでも、きっと大きな喜びに心は満たされています。ただ一つ気がかりなのは、兄エサウのことです。二〇年前、エサウを欺して祝福を奪い取った。兄さんの怒りは鎮まっていますか。三二、三三章は一つのクライマックスです。エサウとの再会。何とエサウは赦してくれたのです。ヤコブの低姿勢ぶりは、痛々しいほどです。その場面に来たら取り上げます。彼はこうしてカナンの地に帰り、シケムの町に落ち着きます。それから神の命令に従い、今日の箇所とも関係がありますが、ベテルに住み、そこに祭壇を築くことになります。

悲しいこともあります。カナンに戻って、ラケルが子供を産むのですが、難産で子供を残し死んでしまうのです。そのとき生まれた子供がベニヤミンです。ラケルにとっては二人目の子供、ヤコブにとっては一二番目です。

その後父イサクが一八〇歳で亡くなります。兄エサウは、ヤコブから別れて南方に移動します。ヤコブは、名実共に、アブラハム、イサクの神の祝福と使命の担い手と

なります。この後、創世記の族長の歴史は、ヤコブの一番目の息子、ラケルの子ヨセフへと移っていきます。ヨセフは、今回の旧約の学びでは取り上げません。ヨセフの前までの予定です。

2 逃れの旅へ

さて今日の箇所、そうしたヤコブの逃れの旅路の始まりで起こった出来事を記しています。

そしてここで、ヤコブの人生をこの後も貫くことになる主なる神の恵みと、ヤコブの信仰が明らかになっています。

ヤコブはベエル・シェバを立つてハラシムへ向かった。とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあつた石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた（一〇〜一二節）。

ベエル・シェバを出てしばらくし、「とある場所」で、ヤコブは石を枕に一夜を過ごします。すると夢を見た。そして夢の中で、天まで届く階段があつて、そこを神の使いが上り下りしていたというのです。

「主よ、みもとに近づかん」という有名な讚美歌があります（四三四、五四年版三二〇）。特にアメリカではポピュラーな歌で、タイタニック号が遭難したとき、バンドが最後までこれを演奏し、歌いながら沈んで行ったと言われます。この讚美歌は今日の箇所のヤコブの夢のことを歌っているものです。今日の箇所は、聖書の中でもっとも有名な場面の一つです。

階段を天使が上り下りするというイメージは、メソポタミヤで造られていた何層にもなった聖所（ジックラットと呼ばれる）から来たものです。バベルの塔（創世記一章）も同じです。一番上は神の住まいです。下が聖所になっていて、たいいてい外階段で行き来するのです。「先端が天にまで達する階段が地に据えられていた」（聖書協会共同訳）。梯子（はしご）ではなく階段です。意味は、天と地とがつながっているということです。

天と地とがつながっているところ、この場所は、神が御使いを通して地上に働きかける場所だと夢で告げられたのです。

確かにそこは特別の場所だったので。というのも、夢の中で、ヤコブに、主なる神が現れたからです。

わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。見よ、わたしは

あなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない（一三〜一五節）。

ここで何よりはじめに神ご自身が、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主であると名乗っています。それは、父祖たちへの祝福と約束をヤコブが引き継ぐということでもあります。主がヤコブを選んで、すべての国民（くにたみ）のためのわたしの救いの計画を行うという御心を表したのです。

主がここで語ったのは、それだけではありません。あなたを「必ずこの土地に連れ帰る」と約束しています。

ヤコブがいま郷里を離れ、逃れの旅に発とうとしたときに神は、必ず連れ帰ると約束するのです。離れなければならない、これは覆（くつがえ）すことのできない現実です。必ず連れ戻す、それも同時に確かな約束なのです。「わたしはあなたといつも共にいる」。ヤコブにとってこれほど力強い言葉はなかったでしょう。自らが蒔いた罪の果実（み）をくらい、見知らぬところへ逃げようとしています。どこからも光は射してこないのです。これからだって、エサウから家督を奪ったときのように、自分でも何をしているのか、分からなくなることがあるかも知れません。そのようにして暗闇を歩くことがあるかも知れません。自らの進む道を、さやかには見えないときもあるでしょう。でも、その時も、〈わたしは〉あなたと共にいる、というのです。神はヤコブに、こうしてくれ、そうしたら、わたしもこうしてあげようと言っているのではありません。主なる神の言葉は、ここで何と一方的なことでしょうか。しかしそれこそが神の恵みなのです。

3 上り下りする御使い

ここまで聞いたとき、ヤコブは目を覚まします。彼の最初の反応は、恐れとおののきでした。神がここにおられるという畏れだったのです。この恐（畏）れ、今までのヤコブにはなかったものです。

ヤコブは、その恐れに応じて二つのことをしています。一つは、その場所にベテルという名前を付けたことです。

ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立て、先端に油を注いで、その場所をベテル（神の家）と名付けた。ちなみに、その町の名はかつてルズと呼ばれていた（一八〜一九節）。

ベテルという町は、聖書によく出てくるので、あるいはその名前は、覚えておられると思います。

エルサレムの少し北に位置するイスラエルの歴史で重要な役割を果たした聖所、礼拝所のあったところです。アブラハムるときにその名前は出ています。新約にはその名は出て来ません。

いま読んだところによれば、ベテルは、ヤコブによってはじめて特別な場所となったところだ(三一・一三)。その前はルズと呼ばれていました。しかしヤコブが次の朝早く起きて、石を立てて記念碑としたのが始まりです。この時までベテルはまさに何もない太古の姿を見せていたのです。ヤコブがしたことは、そこを礼拝所としたことです。

もう一つのことがあります。誓願です。誓いです。

ヤコブはまた、誓願を立てて言った。「神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、わたしが記念碑として建てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます」(二〇～二二節)。

誓願は、ここでもそうですが、〈何々してくれば、何々します〉という一種の取引のようにも見えます。その意味で、神との間では正しい在り方とはいえないのではないかと、いうこともできます。

しかしこう考えることもできるでしょう。つまり、この箇所がまさにそうだと思いますが、神への感謝として、自ら選んだことを実行するという決意、その表明です。私ども一人一人は弱い存在です。そうであればこそ、そうしたことを一つの信仰の支えとして歩むとはありうることです。ヤコブは、神の一方的な恵みに、ここにあるような仕方で応答しようとした。ここに、私ども、ヤコブの深い信仰と神信頼を見ることができるようになります。

最後にイエスの言葉を取り上げます。天に届く階段を天使が上り下りしていた、まことに印象深いヤコブの夢です。これを私どもは、天と地とが、いわばつながったことだ、それがその意味だと申し上げておきました。イエスも、そのようなものとしてそれに触れています。

はつきり言っておく。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのをあなたがたは見ることになる(ヨハネ福音書一・五一)。

これはイエスがナタナエルという人との会話の中で言われた言葉です。人の子とはむしろイエスのことです。「神の天使たちが人の子の上に昇り降りする」というのはイエスこそ、神のことを地に伝え、地上のことを、私どもの祈りを、天上の神に執り成す方だということです。

ヤコブの夢との違いは明らかです。神と人とのつながりは、もはや一つの場所に制限されるものではないのです。イエス・キリストが「仲保者(ちゆうほしや)」(第一テモテ二・五、口語訳)として、私どもの思いを神に届け、神の御心を私どもに伝えてくださるのです。どこにあっても、聖霊の力によって、それをなしてくださるのです。イエス・キリスト、この方によって、私どもも神との交わりに生かされたいものです。

(一〇月二日)